

10代の未遂者支援における現状と課題

資料2

現状

○令和2年度の未遂者支援（10代）から把握したこと

- ・本人に発達障害やその疑いがあるケースが多かった。「空気の読みにくさ」や「人との距離のとり方が難しい」という特性があったり、「自分は他の人とは違う。すごく敏感。」と感じている。
- ・中には強迫性障害（疑い含む）をもつケースもある。
- ・コミュニケーションが必要な集団生活の場において、友人関係でトラブルになる。その結果、学校生活がしんどくなり、ストレスとなる。
- ・そのストレスに対して、リストカットや過量服薬という形で、ストレス対処を行ってしまう。
- ・家庭環境に課題があるケースもある。母が精神疾患を持ち精神的に不安定で、母の気分で言うことや対応が変わったり、両親の喧嘩や子どもへの強い叱責などにより、子どもは心理的負担を負う。またネグレクト傾向がある家庭もある。
- ・SOSを発信できているケースは、学校の先生に発信できていた。
- ・親（特に母親）が、特性のある子どもへの関わり方についてわからない。
- ・親自身が、自分の思いを話せず、対人構築がうまくできないため、親が子どもに人との関わり方を教えられない。
- ・自傷行為がある子どもに対して、話を聴いているだけでいいのか、自殺してしまうことはないのか、支援者は自分たちの支援について不安を抱えており、医療（専門家）につなぎたい、医療の判断がほしいと思っている。

課題

- ①自分の困っていることやしんどいことを、身近な親に相談できていない。学校にも相談できていない子どもがいる。
- ②親は、特性のある子どもへの関わり方がわからず、そのことを相談する場がない。また親自身が、困りごとや子どもへの関わりについて、周囲に相談する力が弱い。
- ③支援者が、自分たちの支援について、これでいいのか不安に思いながら支援を行っている。



今後の方向性

- ①子どもが自分の思いを話し、SOSを発信できるように、SOSを出せる場や方法、子どもたちへの教育について検討していく。
- ②親が自分の困りごとや子どもへの関わりについて周囲や支援者に相談できるように、10代の子どもを持つ親の支援について検討する。
- ③支援方針を出したり、役割分担をする場（リスクアセスメント会議）など、支援者への支援体制を引き続き構築していく。